

古代中世日本と中国の鑄鉄鍋釜

五十川伸矢（京都橘女子大学文学部文化財学科）

1．日本の鑄鉄鍋釜の変遷（図1・2）

日本古代（7～10世紀）の鑄鉄鍋釜の遺品は極端に少ないが、鑄造遺跡出土の鑄型を参考にすれば、羽釜、椀形の鍋、把手付鍋などを確認できる。最近、奈良県明日香村～川原寺北限で、7世紀末の大型羽釜の鑄型が出土した。8世紀末から9世紀の羽釜の形態は、緑釉陶器に模倣されている。獸脚は、羽釜あるいは鍋と組み合わせたと推定される。

中世（12～16世紀）の鑄鉄鍋釜には、羽釜のほかに、屈曲する口縁部をもつ鍋A、吊耳をもつ鍋B、内耳をもつ鍋Cや茶釜などがあり、羽釜は畿内とその周辺部、鍋Aは西日本、鍋Cは東日本を中心に分布する。三脚付小型羽釜は中世前半にしかみられず、鍋Bは14世紀ごろに西日本に出現し、中世末には東北日本まで、その分布を広げていった。

2．中国の鑄鉄鍋釜の変遷（図3～7）

口縁部の直立する壺形は春秋に出現し、やがて長い口縁部を失い、漢の「ふく」や羽釜形へと変化していったと推定される。口縁部が斜めに立ち上がる壺形は銅器を模倣したものだが、西漢に出現し唐まで命脈をたもっている。鼎形は春秋の例があり、時代とともに、形態をくずしてゆき、唐～宋時代には盛行するようだ。鍋形の資料が少ないが、岡崎敬によれば、漢では釜、唐では鍋が盛行し、煮沸形態の材料の土器より金属器への変化、主食穀物の粒食より粉食への変化が、これに対応しているという。つけ加えるならば、その次にくる宋も、鍋が盛行した時代と推定される。

高句麗・渤海の羽釜や西夏の鍋は、中原のものにくらべて、かなり個性的である。契丹・遼には、長い三脚のついた小型の羽釜と脚なしの大型羽釜・口縁が屈曲する鍋がある。金には、三脚付の小型の羽釜と脚なしの大型羽釜や三脚付の吊耳付鍋がある。吊耳付鍋には、脚の退化したものがある。

ま と め —鑄鉄鍋釜の日中比較—

渤海の羽釜は秋田城跡で発見されている。現在、福島県・埼玉県・富山県などで調査されている9～10世紀の鑄造遺跡出土鑄型から復原される羽釜の形態との比較検討をすすめている。福島県新地町向田A遺跡例は、秋田城出土例にやや類似するが、埼玉県大井町東台遺跡例、富山県小杉町上野南B遺跡例などは、肩部がふくらんだ形態を示し、秋田城例とは異なる。また、群馬県北部一帯に分布する羽釜は上記とは、また異なった長胴の器形を示す。どうも古代の羽釜には、かなりの地域差があり、系譜を異にする可能性もあると思われるが、今後の検討を要する。

中原では唐以降衰退する羽釜が、東北地域では展開盛行してゆく。脚付の小型羽釜や脚なしの大型羽釜そして口縁の屈曲する鍋からなる遼の煮炊形態は、若干形態は異なるが、中世日本の中世初頭の煮炊形態に類似している。金にみられる脚の退化した吊耳付鍋は、日本の鍋Bの祖先と

考えたくなる。このほか、内耳の鍋Cは、中国東北地方にみられない。この鍋Cは、日本本州の北半から北東の地域の文物であろう。

参考文献

- 飯村均「平安時代の鉄製煮炊具」『しのぶ考古』10 1994
- 五十川伸矢「古代・中世の鉄製物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第46集 1992
- 岡崎敬「中国古代におけるかまどについて」『東洋史研究』14-1・2 1955
- 越田賢一郎「北日本における鉄鍋」『季刊考古学』57 1996
- 小嶋芳孝「靺鞨・渤海と日本列島」『環日本海論叢』8 1995
- 潮見浩『東アジアの初期鉄器文化』（吉川弘文館）1987
- たたら研究会編『日本古代の鉄生産』（六興出版）1987
- 孫達己ほか編『中国考古集成 東北巻』全20冊（北京出版社）1997
- 孫達己ほか編『中国考古集成 華北巻 北京市・天津市・河北省・山西省』全20冊（哈爾濱出版社）1998
- 孫達己ほか編『中国考古集成 華北巻 山東省・河南省』全20冊（中州古籍）1999
- 趙清俊「遼金時代契丹女真族使用銅鉄炊器習俗的探討」『古民俗研究』（吉林文史出版社）1990